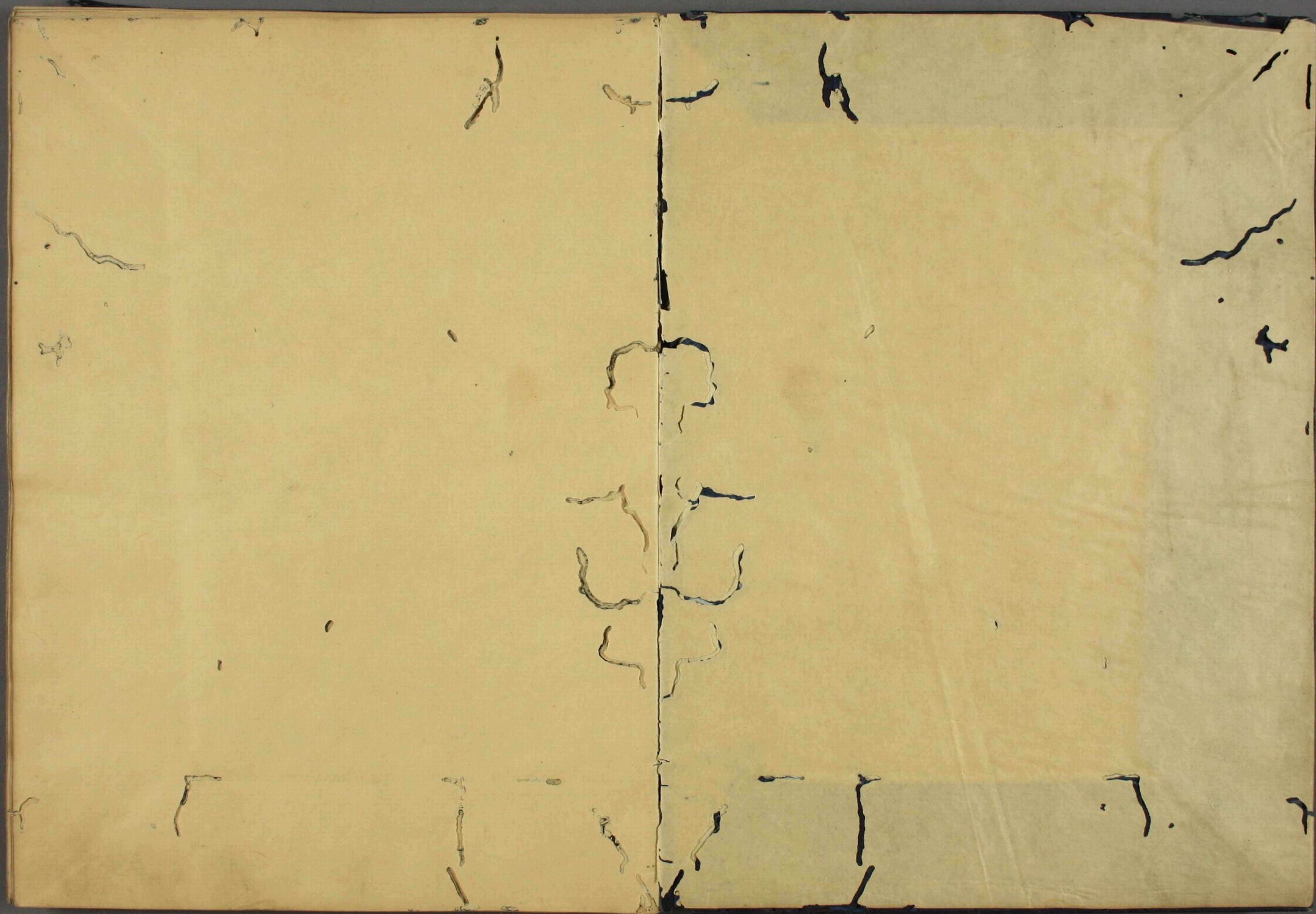




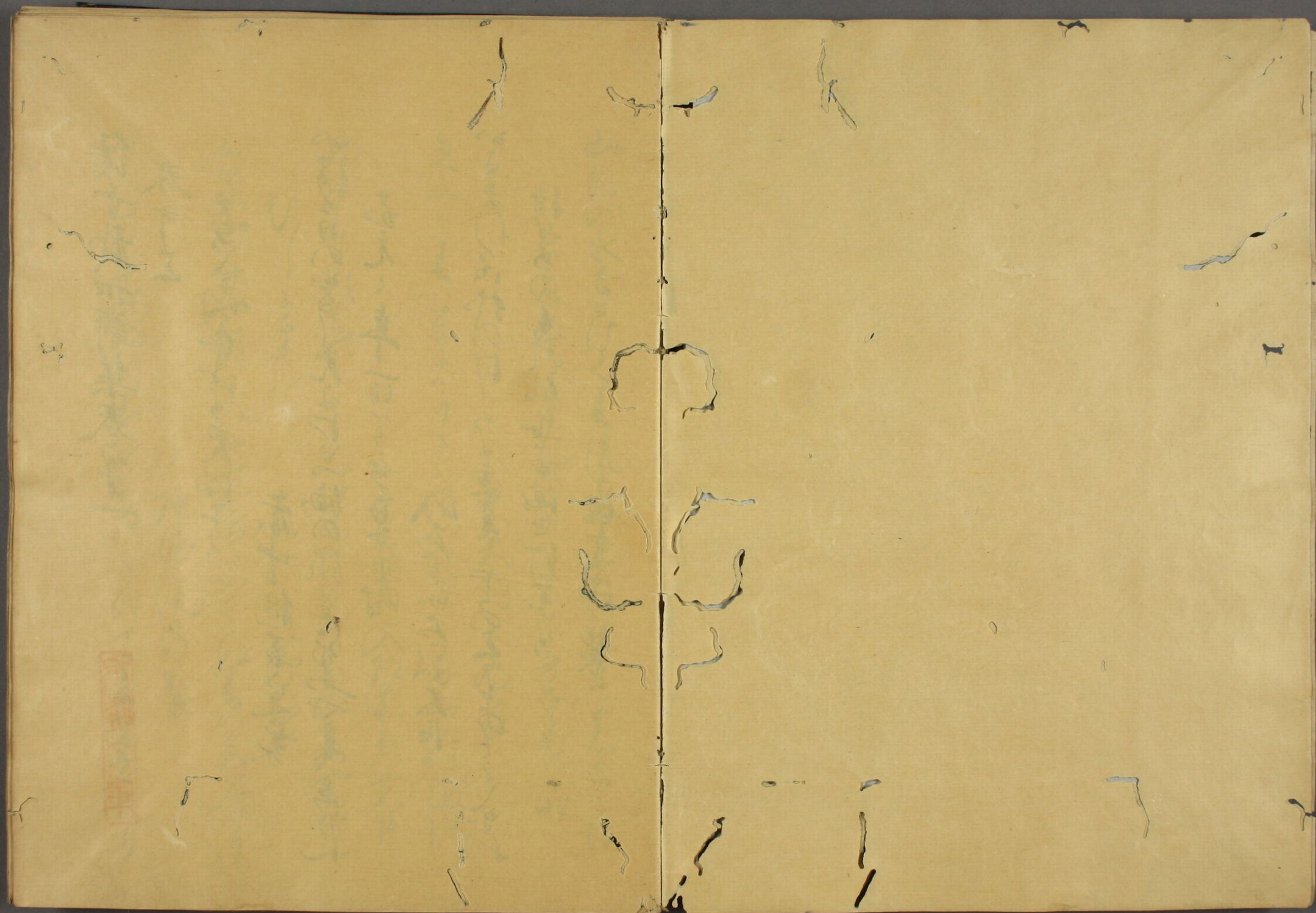
續子載  
上













續千載和評集卷第一



春行上

あけの春のよきとて

兼中納言定家

あけの日のあけの春のよきとて海の花もあけの春のよきとて  
あけの春のよきとてあけの春のよきとて

入道兼右大臣

あけの春のよきとてあけの春のよきとてあけの春のよきとて  
あけの春のよきとてあけの春のよきとて

兼中納言定家

あけの春のよきとてあけの春のよきとてあけの春のよきとて  
あけの春のよきとてあけの春のよきとて

兼中納言定家

あけの春のよきとてあけの春のよきとてあけの春のよきとて  
あけの春のよきとてあけの春のよきとて

兼中納言定家

あけの春のよきとてあけの春のよきとてあけの春のよきとて  
あけの春のよきとてあけの春のよきとて

兼中納言定家

あけの春のよきとてあけの春のよきとてあけの春のよきとて  
あけの春のよきとてあけの春のよきとて







家名より  
家名より守りたる道ゆへ梅記のりる家の名をの勢

建保元年内裏百歳言合より

八条院言合

その言より推して一梅記のりる家の名をの勢

源氏物語

と訓じたる事ありし我々の頃の梅の言の心

長秋の時の海風

梅の言よりその言の勢よりいふもいふも言の勢より

女白鳥言合より

古よりいふの勢よりいふもいふも言の勢より

梅の言より

梅の言より梅の言より梅の言より梅の言より

正治二年後鳥羽院より

後鳥羽院言合

その言の勢よりいふもいふも言の勢より

室治二年後鳥羽院より

室治言合

その言の勢よりいふもいふも言の勢より

弘安元年龜山院より

弘安言合

その言の勢よりいふもいふも言の勢より



馬より...  
...  
...

院御製

...  
...  
...

伏見院御製

...  
...  
...

後二条院御製

...  
...  
...

...  
...

後深院院御製

...  
...  
...

前大納言御製

...  
...  
...

帝盤升入御製

...  
...  
...

信里御製



神のふらふら香とくひつはるぬえはきりし  
弘安百のくわぬふら

入部前太政大臣

美の摘神つるひのぬきぬらふらの原はかきかへて  
かえり百首さしよ一時美菜

太政大臣

いづくをぬくといふかむの海らさら美菜よき摘  
道徳の家は海風よき白雲の美菜つるふら  
ふら

大中臣法定朝臣

わらわらふらふらふらふらのすむくはさるるとは摘

美菜よ

法原保胤父

よもくくは美のぬきまらるん美なつるふら今ぬき  
弘安女はゆふふら

相攝

美のくわの原はくは庭よきひともえは海らる  
松と庭よ

頂徳院御製

こぼきは美をくくは美の松は庭はきりつる  
河洗孫政家百のうら庭一

有原信実御辰

美の原はれ松の物庭は川は庭は美にさるふら







百のうきまゝ一時

藤原乃定朝臣

まぬらふは海をこみか梅のえのむしおのまきりまの清雪

書中一

九条大長井

あまのうららの梅は梅は我神よりおらるるまゝの風

二品は親王光朝

おもしろくあはれいふと我翁の梅はまゝのまゝの風を吹

室は百のうきまゝの梅葉風

後醍醐院御製

いふまゝのまゝの梅はがいにあはれいふまゝのまゝの風

建永二年のうきまゝの梅のうきまゝのまゝの風

藤原乃定家

梅はしをききと梅ののまゝの梅のうきまゝの風

百のうきまゝの梅

藤原乃定家

梅のうきまゝの梅のうきまゝの梅のうきまゝの風

梅のうきまゝ

藤原乃定家

我翁の梅はしをききと梅ののまゝの梅のうきまゝの風

まぬらふは海をこみか梅のえのむしおのまきりまの清雪

百のうきまゝの梅

藤原乃定家



あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

前大納言殿

おまん紙のついでに...のついでに...のついでに...  
おまん紙のついでに...のついでに...のついでに...

は辛國助

あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

前大納言殿

あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

永海門院

あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

中務

あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

入道前大納言殿

あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

中務に奉る親王

あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

寛平侍所右文左公方

紀友則

あつたてのついでに...のついでに...のついでに...  
あつたてのついでに...のついでに...のついでに...

後主御孫殿前大納言



あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に

贈送二位あり

あえい百も多しよ一時に  
あえい百も多しよ一時に



言のけしき輝の梅におぼんしてひよす奇むのさる

あまのあまの命よ 兼大僧正慈法

梅のさるあまの命よのさるあまの命よのさるあまの命よ

禁中盛花といふかよ

伏見院御製

いづれをさるあまの命よのさるあまの命よのさるあまの命よ

梅のさるあまの命よのさるあまの命よ

山階入道大君

いづれをさるあまの命よのさるあまの命よのさるあまの命よ

いづれをさるあまの命よ

権中納言公確

いづれをさるあまの命よのさるあまの命よのさるあまの命よ

いづれをさるあまの命よ

は下定有

いづれをさるあまの命よのさるあまの命よのさるあまの命よ

いづれをさるあまの命よ

たす君

いづれをさるあまの命よのさるあまの命よのさるあまの命よ

いづれをさるあまの命よ

兼美雅有

いづれをさるあまの命よのさるあまの命よのさるあまの命よ

いづれをさるあまの命よ

兼盛升入道兼右大臣



今昔の事なるを記す所の御書  
山崎門流御書

山崎門流御書

此書は我が国の御書に於ては  
久松六平公の御書に於ては

皇太后御書

今昔の事なるを記す所の御書  
皇太后御書

皇太后御書

今昔の事なるを記す所の御書

皇太后御書  
一  
一

皇太后御書

今昔の事なるを記す所の御書  
一

皇太后御書

今昔の事なるを記す所の御書  
一

皇太后御書

今昔の事なるを記す所の御書



續千載和歌集卷第二

春奇下

室泊百りちりきり花

後深院御製

かやせしとよの言ねとせむとく人

西園寺入道兼右大臣家

とつらんよ 前大細言為家

あしをうて言ねり日影じよ

源重之女

春の日は花よらのわく

藤原清衡御製

らふのさむらひのたむらひ

家よちかへしむ下月

後深院御製

ての月をえよとて

後深院御製

ほのひのさむらひのたむらひ

西園寺入道兼右大臣家

後深院御製

あしをうて言ねり日影じよ



山内

淡天門院

吉野よりお移れさるるいふまゝに御座りし御座りし御座りし

兼大納言

わじら藤のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし

白河

六條内大臣

白河のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし

正二位

大納言の御座りし御座りし御座りし御座りし

白河

右大臣

白河のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし

白河

兼大納言

白河のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし

白河

平貞時

白河のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし

兼大納言

白河のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし

白河

内大臣

白河のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし

白河

兼大納言

白河のむねよき御座りし御座りし御座りし御座りし







めいしんりょうの御行年なり

後鳥羽院御製

花散る御時を惜みしは昔よりしき風を吹

きしむ

今たふぶ親王御時

信じてしるべきは事なきはとてしるべきは

もあらず

源義氏御時

なすのしらの御時付く又まふもあらず

天徳元年内裏より公へ梅

中務

年ころ来つてしる梅もあらず

堀河院の御時文の御しるし

州よりしては事なきはとてしるべきは

源俊賴御時

吹風よるしる御時文の御しるし

しるし

平宣時御時

はるしる御時文の御しるし

藤原綱玄御時

御しるしる御時文の御しるし

弘安百三十九年

安土門院御時



い身人よ... 一音... 一音... 一音...

世言中より

藤原門流かお

うらなは... 見... ね... ね... ね... ね...

よきく... 一音...

よ... 一音... 一音... 一音...

よ... 一音... 一音... 一音...

権人細言虫家

ま... 一音... 一音... 一音...

よ... 一音...

白河院御歌

ね... 一音... 一音... 一音...

下京... 一音...

中... 一音... 一音... 一音...

よ... 一音...

野交た大臣

い... 一音... 一音... 一音...

よ... 一音... 一音... 一音...

西... 一音...

誰... 一音... 一音... 一音...

亦... 一音... 一音... 一音...

よ... 一音...

下... 一音...

よ... 一音... 一音... 一音...



世帯家といふこと 頂助は親と

世帯つともあふくろく山梅り知れんぬのむね常と

世帯申すは下と書

あふくろくをくろくつて書たのむねいふくろく書山風

平宗の御印

あふくろくをくろくつて書たのむねいふくろく書山風

友原隆信御印

あふくろくをくろくつて書たのむねいふくろく書山風

前大納言なる氏

あふくろくをくろくつて書たのむねいふくろく書山風

寛治二年八月高陽院方合り梅

権中納言通俊

善風く吹くもらふ梅花むのりよと梅よりつて

梅りつて 花山院御製

梅花むのりよと梅よりつて 人よみしてまゝとらん

大宰権帥為経

梅花むのりよと梅よりつて 人よみしてまゝとらん

あえ百のりよと梅よりつて

前孫次郎大直

あえ百のりよと梅よりつて 人よみしてまゝとらん



あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす

あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす

とて世をたす

あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす

とて世をたす

あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす

あはれにのりしとて世をたす

年乳母

あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす

中納言朝忠

あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす

とて世をたす

あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす

あはれにのりしとて世をたす

とて世をたす



集義雅經

春風花りくもなほ目よりの道くろくもく  
名不の奇いもるる中よ

津守國卿

桜花のくもなほ目よりの道くろくもく  
情落むらつる中よ

りる花のあなほ目よりの道くろくもく  
白のくもなほ目よりの道くろくもく

あなほ目よりの道くろくもく  
雨後さあつたよ

兼園白太政大臣

雨く新たの花の風くろくもく

むすく新たの花の風くろくもく

まのく新たの花の風くろくもく

後は花のあなほ目よりの道くろくもく

後惠法師

花のあなほ目よりの道くろくもく  
修理のあなほ目よりの道くろくもく

後頼朝臣

花のあなほ目よりの道くろくもく  
大納言經信



春風の吹まよ時に桜むらりゆの枝よ咲くしをたる

兼内右大臣

古柳の花のまよるにけりてまよの屋上の桜の枝よむら

りけりて花のまよるにけりて

後三位氏久

ちる花の流よまよるにけりてまよのまよるにけりて

西園寺のまよるにけりて

常盤井入右大臣

ちるまよるにけりてまよるにけりてまよるにけりて

西園寺入右大臣

けりてまよるにけりてまよるにけりてまよるにけりて

源兼康卿臣

あまのまよるにけりてまよるにけりてまよるにけりて

源朝臣

吹風のまよるにけりてまよるにけりてまよるにけりて

平貞時卿臣

あまのまよるにけりてまよるにけりてまよるにけりて

平新時

あまのまよるにけりてまよるにけりてまよるにけりて

兼大僧正



こころをよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと  
藤原泰宗  
りつるけの梅ひけそむの浪立ちる風を吹  
かえりよそよそしよしよと

津守國を

こころをよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

風をよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと  
ふ水二年内裏しよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

ふ水二年内裏しよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

雲とのと波をよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

硯のよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

依見院御製

おもしろくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

入道末吉殿

こころをよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

こころをよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

後鳥羽院御製

けりよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

けりよそよそしくしよしよとわしの記よから白き  
はとまむと

後鳥羽院御製



美野守の御書に云くは

赤入細言の御書に云くは

後二位家隆

公の御書に云くは

水暦二年四月内裏言公の御

修理亮の御書

公の御書に云くは

月夜門流の御書

帝監升公の御書

公の御書に云くは

水暦二年二月内裏言公の御書

赤入細言の御書

公の御書に云くは

赤入細言の御書

依凡院御書

公の御書に云くは

赤入細言の御書

公の御書に云くは

西園寺入公の御書

公の御書に云くは



高天原たふ見人といふもよ

大御千早

清くもくもくはるる高天原のあまのついでに

種酒をさかす命よ

あまの風よむらりぬらん

あまのまもるる

大御千早

あまのついでに高天原のあまのついでに

あまのついでに

あまのついでに高天原のあまのついでに

大御千早

あまのついでに高天原のあまのついでに

あまのついでに

あまのついでに高天原のあまのついでに

大御千早

あまのついでに高天原のあまのついでに

大御千早

あまのついでに高天原のあまのついでに

あまのついでに

大御千早







弘安四年八月廿一日

前大納言為氏

御書はなほまことに御心のむよりけり申す所  
有程ねとてつらとよと御を行き

はる御製

おうえはよりとてきくもたはるる世のなる見  
起しらす

右近右将房之

しよまもむのうらよおうえよりくおきねのなる  
二葉入る田太

二葉入る田太

二葉よりぬきしよ右近の本言に松よりと御書

滝信朝臣

世は風流しとらぬき妙の屋とねのなる  
海つらと愛し友のむとけりきりよ

伊勢

我意のむとてのじなむとてくしよはる御  
天徳は年田裏言公り友

中納言朝忠

しよはる友はしとくおより母のまむと  
海風のましと友のあつらふ

平益盛



多難をくぐりて我君の如く本意くくける者  
は申候は御座候

友原宗經

寛治二年八月廿一日

右大臣

右大臣

右大臣

関白内大臣

右大臣

権大納言

右大臣

右大臣

後鳥羽院御製



續千載和歌集卷第三

續千載和歌集卷第三

夏守

定法一日守時首夏

衣笠内大臣

春のさかすかにあはれむ  
五月一日 衣笠内大臣  
あはれむ春のさかすかに  
卯花の比通梅よ人の心

赤深徳門

あはれむ春のさかすかに



氷久四年四月十日有御成事合し卯辰と

丁未大吏取物

卯辰辰卯の日の卯辰とすころ布とすころ

千八百有合し 二条院讃岐

神皇正統記の世に云ふより山部云ゆらひしを

弘安一白のちまはる時

式部院出通

信の松久しを親をさかしの一松とす

弘一らす かんかん

物言と我の世にす時をいはずまの人のあはれ

高子院合し 在元元

と出てもん物言の時を我の世にす

弘一らす かんかん

ほのちまの世にす親の人の世にす

高子院合し 在元元

後深草院少将内侍

郭云物言の時をいはずまの人のあはれ

高子院合し 在元元

の世にす親の人の世にす

高子院合し 在元元



茶集後附友

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶石不長

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶園自若飲不長

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶大納言脚重

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶石不長

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶大納言脚重

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶大納言脚重

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶大納言脚重

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶大納言脚重

茶の味をいかに好むの時をいかに楽しむか一茶も

茶大納言脚重



三乗入るた大臣

のちのふまきー

平時元

のちのふまきー

友原泰宗

のちのふまきー

兼中細言孝雄

のちのふまきー

権大納言直孝

のちのふまきー

あえ百三言まー

兼大細言信定

のちのふまきー

伏見流御製

のちのふまきー

友原基俊

のちのふまきー

あはく卿

のちのふまきー

伴海



此の秋はさきつきの月約しつゝいふにねんをよめる  
時子時きつゝいふと

兼道法師

子規の鳥の月たぐひのいふはる秋はれいふ  
人の病れ急し時きつゝいふよ海はゆる

源石洲

可きあはれつゝいふよ里の音もあはれいふ  
ふち中し

法眼行洲

あはれつゝいふよ親のけつるをの記さる  
権中納言為藤

あはれつゝいふよのち子規の鳥はれいふ  
室治百の音あはれつゝいふ

後漢陽流洲製

并もいふよつゝいふ時きつゝいふあはれつゝいふ  
兼大納言為世の海を約し去日新可つゝいふ

有原為定洲

あはれつゝいふよつゝいふ時きつゝいふあはれつゝいふ  
つゝいふ

平富時洲

子規一羽つゝいふよつゝいふあはれつゝいふ  
は下中洲



御成程候事申上り親方御心海に御成程

は守國助女

は守國助女御成程候事申上り親方御心海に御成程

二品は親と先助

親に先助言申上り候事申上り親方御心海に御成程

百三十五箇一

は皇御製

御成程候事申上り親方御心海に御成程

は守國助女

御成程候事申上り親方御心海に御成程

永保元年秋子内親之家方公

年内侍

御成程候事申上り親方御心海に御成程

御成程候事

西村は御

御成程候事申上り親方御心海に御成程

永保元年内裏にて書天候事

京極入内親方御心海に御成程

御成程候事申上り親方御心海に御成程

御成程候事

大宰左衛門

御成程候事申上り親方御心海に御成程



永曆二年内裏に後方合し時高とよむ  
まゝ

権中納言通俊

ゆゑまの人のさかん時高はかく宿と鳴くこと  
曰ふと

禊子内親王家持津

まゝとせしめたる通ぬる子規人と来るぬれの一五  
後徳正寺に大臣のまゝとすんぬる時  
高も人から先よとていふこととて

上西門院若清

ゆゑの物言ひとつ子規約とまゝとたの福免了  
及方中り

前美祿雅有

拾麻のゆゑにさかす夫のこゝろ出くさく時高の  
福免了り時高とよむ

前関白大臣世宗

ゆゑのゆゑとて来ぬる子規つとるまゝとてゆゑ  
時高とよむ

前大僧正良信

わづきの名に八幡よとてゆゑとてゆゑ  
ゆゑとよむ

依仁院新掌お

子規あつたまゝとつとるゆゑに福免のゆゑにまゝと  
永福門院

時高はまゝとてぬの預りゆゑにゆゑとてゆゑ



弘治二年 飛山院より...

入道入道大臣

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



















延一らす

頂徳院御製

朝文くこのの上のよの草のつらねのつらねの

躬恒

文草の目しよぬくぬくをよの草のつらねの

建保六年四月庚申のつらねのつらね

兼義雅經

文草のつらねのつらねのつらねのつらねの

百のつらねのつらね

は皇御製

文草のつらねのつらねのつらねのつらねの

後二位宣旨

文草のつらねのつらねのつらねのつらねの

文草のつらねのつらね

院御製

文草のつらねのつらねのつらねのつらねの

龜山院御製

文草のつらねのつらねのつらねのつらねの

山平のつらねのつらね

文草のつらねのつらねのつらねのつらねの

文草のつらねのつらねのつらねのつらねの



本意中

藤原行房現任

文子の御書に藤原の御下り木の風は  
御書に御書に御書に

院御書

風は木の葉の御書に御書に御書に  
御書に御書に御書に

藤原僧云後定

文子に藤原の御書に御書に御書に  
贈位三位為子

大井河原の御書に御書に御書に

取巻内裏百三十五箇の御書

藤原細言為子

かたはる御書に御書に御書に御書に  
御書に御書に御書に

御守國を

御書に御書に御書に御書に御書に  
御書に御書に御書に御書に御書に

藤原細言為子

御書に御書に御書に御書に御書に







Person No. 155

今右首右政大臣

夕立に雲の影のこぼれをよきけりあつての御事

夕立よ

祝部成久

龍もゆく晴つていづる日影よりの夕立の雲

龍よ

中臣祐賢

杖さぬとるぬ針とあ夜すきの原のうしろ下風

弘長百のうしろすきの時納涼

赤大納言為氏

涼さのうしろすきの杖見らるる女よの杖

涼さ

今右入右衛門右政大臣

夕立の雲の影のこぼれをよきけりあつての御事

建保二年百のうしろすきの時

兼中納言定家

夕立の雲の影のこぼれをよきけりあつての御事

久井右衛門右政大臣

今右門院為家

夕立の雲の影のこぼれをよきけりあつての御事

山内入右衛門右政大臣のうしろすきの時納涼

源兼光朝臣



Am... 庭の... 木... 石... 庭... 庭

文... 中... 為... 石... 庭

子... 書... の... 木... 庭... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... 庭... の... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... の... 庭... の... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... の... 庭... の... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... の... 庭... の... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... の... 庭... の... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... の... 庭... の... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... 庭... 庭

庭... の... 庭... の... 庭... 庭



千文百歳寸合

後鳥羽院御製

此後何事もまじりの水く遊んで智恵ぬ杖の杖  
まん

續千載和評集卷第四

秋声上

百の言を一時の杖の杖と

入る氣を政大臣

いはさかしく神よと君の心杖と杖の風

曰ふと

中務の宗子親と

と綱刀重に居てしやまのあはれ人の心の杖の杖と

あまの御方合と

惟の親と

あふら秋の下葉よかひをそと朝あつる杖の杖

もくらし

先の孝子入る杖の杖



1560年 武田信玄の死

同日 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

中納言 家持

武田信玄の死 武田信玄の死

中納言 家持

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

中納言 家持

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

中納言 家持

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死

武田信玄の死 武田信玄の死



選子内親王

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

入道前右大臣

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

後鳥羽院御教

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

前中納言定家

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに

あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに  
あまのついでに海にわたるに



皇太子御成

神神ノ秋ノ事此ノ事也

寛和元年田裏云々

紀山院御製

秋ノ葉ノ事白鳥云々

和元百三十九年

権中納言云々

秋ノ葉ノ事白鳥云々

和元百三十九年

秋ノ葉ノ事白鳥云々

和元百三十九年

権中納言云々

秋ノ葉ノ事白鳥云々

和元百三十九年

権中納言云々

秋ノ葉ノ事白鳥云々

和元百三十九年

秋ノ葉ノ事白鳥云々

権中納言云々

秋ノ葉ノ事白鳥云々







舞臺のCarmenのL'Amour

九条右大臣

白鳥のくさくさの髪をよそひて国を渡る

歌一しす

はす田道

静かなる海を白鳥の神よとてわたりぬ

古に松蘭といふことよ

赤僧の石燈

南河よりわたりし舟はくちかき海に揺る

天孝の八年の海風

源公忠の石

秋の野よりわたりし舟はくちかき海に揺る

天孝の八年の海風

天孝の八年の海風

天孝の八年の海風

天孝の八年の海風

源公忠の石

秋の野よりわたりし舟はくちかき海に揺る

天孝の八年の海風

源公忠の石

秋の野よりわたりし舟はくちかき海に揺る

天孝の八年の海風

源公忠の石



我宿のたれは新晴よかり物とく春の夕のま

邦省親と

高家の新晴よし主人の神つる夜あそぶ

後三位中久

あつくりのよきりあかりのま神もあつたの物あ

建永元年のうらふとらうの物あ

後二位家隆

我神と朝もりあそびはあつたの神は白雲

朝一りよ 夕一人一りよ

いれはりあそびはあつたの夜あつた

田水門院

朝あつたあそびはあつたの神はあつた

野新と 友原乃定朝臣

神とあそびはあつたのあつたの神とあつた

あつたの神とあつた

は白雲製

高家の神はあつたあつたの神とあつた

あつたの神とあつた

信正行意

高家の神はあつたあつたの神とあつた







ふと木葉交け秋風先いねくこのころの秋  
歌しらす

うきねいあきあらしも秋風よつこわゆる麻の鳴む  
おえいこのころの秋麻

前中納言経純

秋のよきまはらけしつらふ書よとてあきまの麻の鳴む  
は下定為

言ぬの屋上も麻の鳴むとて松とてふり書あきま  
歌しらす  
行念は脚

秋のよきまの言のま言の松の鳴むとてあきまの麻の鳴む

中納言宗高親

よきまの秋風鳴む日におきまの麻の鳴むとて  
月下麻よ  
後院に院民の典侍

よきまの秋風鳴むとてあきまの麻の鳴むとて  
前中納言経房

月夜に秋風を聞きしり麻の言のまの鳴む  
あ月同麻とてよとて  
平貞時朝臣

よきまの秋風鳴むとてあきまの麻の言のまの鳴む  
友原宗徳

歌しらす







少くも木の葉と書よとて木の葉のよきもの

可林門流

皆麻の葉もつとまじらぬの屋をたれ木と書よとて

平宗春

海と木の葉と誰も知物とをの意を麻と書よとて

前中絶言主雄

よあまの海とてよとてよとてよとてよとてよとて

深堅門流

思ふも海葉の風をたれとて木の葉の麻と書よとて

弘安百のちりしもの

龜山流御製

あまの麻の木の葉のよきもの

恒二位行家

木の葉のよきもの

蓮生法師

木の葉のよきもの

平宗定親臣

木の葉のよきもの

海風堂

木の葉のよきもの



歌一す

人丸

ゆくふを井にたもたぬとてそく局はまよんきん

ふぬ百あふふ

後多野流法師

おのころのそとれり言ふ天付室より初局の給

百ころあふふ

権中納言乃右

秋風よまつたきこつたぬらんを山とらのなみかぬ

帝中乃右

赤え流合初局白おはる

秋山の林兼さくらつて帝よりきて過りつ局のあ

帝と

友原宗孝

帝晴く家のハ橋の秋風よあつてまへ人烟こころ

大いね童

かうなすそ望の帝いぬより尾記の神よあつて

ふまへ人

ら海よふ野原の帝れ下家よ海をくても神いぬ

百ころあふふ

はく下定乃

日影よす籠のむれあふは家よきひてらるる物

弘長百ころあふふ

赤大納言乃右



まゝより日影のうつるに計書の羅よてうわきか  
しりらす 永福門院

おしりく赫羅より山人のめ先くし野人の又身  
又永二年八月十五夜あつた身よ未出月と  
ついで

里人のつじを知らぬを山のあまこ月をまきり  
え後羽長と國をゆるきつる百とつら

右原隆祐現位  
又言月約をくも地をうぶまのふとの地れあて  
く月よりくはるのうら後

友原実方現位

もろをよ約し月を約して揚をくはるの地  
しらす 兼大納言為家

此風をよ約し月を約して揚をくはるの地  
入る兼右政大臣

ゆるしりし月を約して揚をくはるの地  
依り流信のうらしきつる月十めつら  
しらす 兼大納言

書しりし月を約して揚をくはるの地  
月を約して揚をくはるの地  
兼大納言



ふのこしききかいてしとて新とてくはるは花いりては

前関白右大臣家藤原

出くぬ花ふもよもよの屋とれ月よもよもよとて

信実朝臣

多し秋の風いふよもよもよとては

権河右大臣

又言に言ふもよもよの屋とれ月よもよもよとて

は助は親とて家めやうとて

は昭保水

ゆつる屋との月とては

きしらす

紀深成朝臣

春月のあやうたはよ新とては

は守國友

天は風とては

平貞文

ぬけり候々竹尾の板より

二条右大臣右大臣権藤

かきよふの風よもよもよとて

四院権藤家百とて

信実朝臣







續千載和歌集卷中五

秋前下

月六撰交とてるんよ

大納言經信

久しき世よとてる秋の月とてる里も候とてみる

歌一十

権左大臣

月夕夜とてる世とてる秋の月とてる山のみねの秋風

歌一十

入道藤原公成

はつと候とてる世とてる秋の月とてる風とてる

氏子の公成

地みよ人のほとてる秋の月とてる世とてる秋の月

月言中

藤原公成

つとてる世とてる世とてる秋の月とてる秋の月

氏子の公成

ふとてる世とてる世とてる秋の月とてる秋の月

百とてる世とてる世

はるの公成

老せよ秋の月とてる世とてる秋の月

藤原公成



前内大臣

はつていふやうに新あひく神あつた木の根付  
も

壬午に資富女

のしるしをいふに新あひく月あつた木の根付  
は

後久我内大臣

言ふに新あひくの名あつた月あつた木の根付  
建保三年戊午院より言ふに

美談雅經

木の根付のしるしをいふに新あひく月あつた木の根付  
百三十三

段田院大物

廿申のまゝのしるしをいふに新あひく月あつた木の根付  
友原え後羽田の海をいふに

彦柴門院但馬

のまゝのしるしをいふに新あひく月あつた木の根付  
も

壬午に資富

木の根付のしるしをいふに新あひく月あつた木の根付  
前僧正

のしるしをいふに新あひく月あつた木の根付  
も

平時道

木の根付のしるしをいふに新あひく月あつた木の根付  
も



は守國道

おのれいふのいはしほくしておのれをいふおのれ月影

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

月影中より

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくしておのれいふのいはしほくして

おのれいふのいはしほくして



いづれもよきなよきしに思ひつゝ神もいほよ月もいほ  
段段門流よていへるいふよきも思ひつゝ月も  
いへる

前中納言之家

みよきいほつゝこの月もいへるよきも思ひつゝ  
いへる

平維貞

大井の氷も思ひつゝいへるいふよきも思ひつゝ  
いへる

前関白之家

月もいへる水海もいへるいふよきも思ひつゝ  
いへる

いへるいへる月 前大納言之家

いへるいへるの月も思ひつゝいへるいふよきも思ひつゝ  
いへる

西園寺入道前大納言之家

いへるの月も思ひつゝいへるいふよきも思ひつゝ  
いへる

前右大臣前大納言之家

いへるいへるの月も思ひつゝいへるいふよきも思ひつゝ  
いへる

前大納言之家



たぬい昔汁も寝ぬよららと月くお色ん

平泰時朝臣

もろくしほらふりかんとおのろぬ月くさじ

百のちよ一時 権中納言為友

とせ月の親くくく入はくわふ少母松風歌

の月よ 後二条院御製

あやあ秋の上風すくく入は松色よとらる月歌

百のちよ一時 中務に宗尊親王

ほちと松風まーくくものろれまらの松風松の月

る曲は親王家のみくくくくよ水申月

前中納言定家

あやあ秋の湯らよくくあはくく計るる月くさじ

百のちよ一時 はり下定為

とら海のかくしほと白ぬ月くくくく秋のく風

た大臣家御多合り月前歌

丹波忠守朝臣

あやあほのよまは未晴く月くくくくみぬ家

もろくす 権中納言為友

浮橋の海く湯らよくくくくや晴く月くくくく波

山路入た大臣家くくくくく月







慈母は親也

今より先年より九月の月を計りては

禁中月也

喜交指事又忠

と云ふ事ありては

二ふは親と云ふ事ありては

ふ二位あり

と云ふ事ありては

月の中

即ち久の親也

此の事ありては

兼大僧に介也

此の事ありては

益金右大臣

と云ふ事ありては

津守國助

此の事ありては

永仁三年八月十日

月同種

と云ふ事ありては

と云ふ事ありては

と云ふ事ありては











いんまやうしんはきりやう  
赤大納言の世に田をゆりて  
おのれをいふ

友原基仁

おしんはきりやうのきり  
おしんはきりやうのきり  
おしんはきりやうのきり

あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま

後三条内大臣

あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま

云清内大臣

あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま

百のうらやまの時  
た大臣

あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま

皇太后の御成女

あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま

田家持女  
あまのうらやま

あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま  
あまのうらやまのうらやま

先皇の御成女



夜半の月よと秋の風よと  
あえり百の言はしむる時揚衣

は下定ぬ

あえり百の言はしむる時揚衣

里揚衣

は下定ぬ

あえり百の言はしむる時揚衣

あえり百の言はしむる時揚衣

友原成盛

あえり百の言はしむる時揚衣

あえり百の言はしむる時揚衣

内大臣

あえり百の言はしむる時揚衣

秋の月

秋の月

あえり百の言はしむる時揚衣

あえり百の言はしむる時揚衣

前大納言俊光

あえり百の言はしむる時揚衣

あえり百の言はしむる時揚衣

同揚衣

あえり百の言はしむる時揚衣

あえり百の言はしむる時揚衣

入道前右大臣

あえり百の言はしむる時揚衣

あえり百の言はしむる時揚衣

大納言重



世にきくものありの海にわたりてはるかにてはるかに  
兼大納言なる人 海にわたりてはるかにてはるかに  
十の字を合す 明色揚衣

兼大納言なる氏

と信じて聞てはるかにてはるかにてはるかに  
明色揚衣

皇太后文天皇後成女

わらわへはるかにてはるかにてはるかに  
揚衣

依元院御製

わらわへはるかにてはるかにてはるかに  
揚衣  
とわらわへはるかにてはるかにてはるかに  
揚衣

建房親王

わらわへはるかにてはるかにてはるかに  
揚衣  
非改つてはるかにてはるかにてはるかに  
揚衣

源邦昌朝臣

わらわへはるかにてはるかにてはるかに  
揚衣  
百の字を合す 明色揚衣

兼大納言なる氏



管つるをすくうくく白雲の曉をさしぬのいそ

弘安百三十九年五月廿二日

大宛江流傳

油のこけ家もたふりて枯風は雅く出のなうん

飛山流傳製

物も枯の日敷とくまつておのまゝくくあれ

おゆは親王家のめすくう

は照源水

白妙の袖をゆきゆきとくく掃きよるあれ

久安百三十九年 皇太后文皇太后成

ら河の火はういりくく早くくく白くく

延長は時菊合よ 友原興風

なごくくむし時乃菊もむいりくくあのみ

離菊よ 二ふは親王美助

おゆさ離いおのまゝくく老をぬ物とくく白菊

菊枝くくくくくくくくく

くくくく製

仙人のふふれはくくくくくくくくく白菊

白菊 けいし源製

りまはは月菊枝くくくくくくくくく



重湯のりよ

新流お南典侍

行末のねとあつての九まよあせうくこれ菊の魚

しり

永福門院内侍

物よりねの日敷もあゆりあつてを庭乃白菊

百のちあつて

兼園白た大臣

我神よあつての三つてを月よあ輝の庭むら根なり

しり

平時教

を月よあ輝の庭むら根なり

況平成久

下宿の湯のあつてのすけとあ葉もねの時あつて

洞院孫政兼大臣

はあのをとりたれねあつてあつてはあ葉一ねし

兼内大臣

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつて

兼大納言経緯

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつて

兼中納言為友

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつて

兼内大臣

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



本系 義雅 友

時ぬり 義の 後 日 義と して 義の 子 義の 孫 義の 曾孫

杖 中 納 言 権 中 納 言 云 確

と ぬ り 義 の 孫 義 の 曾孫 時 ぬ り 義 の 孫 義 の 曾孫

後 三 位 為 信

家 頼 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

家 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

修 理 左 大 進 兼 左

又 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

信 原 元 祐

孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

母 久 之

水 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

後 二 位 家 隆

孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

赤 尾 白 雲 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

贈 後 三 位 為 子

立 田 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義

有 原 乃 嗣 嗣 也

孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義 孫 義



新院御製

あつらひの御葉に物も秋の日記の御葉に

永仁元年九月十日より十日と書也

たす

大井の御葉に物も秋の日記の御葉に

後三位御行

後三位の御葉に物も秋の日記の御葉に

言はるる御葉に物も秋の日記の御葉に

秋の御葉に物も秋の日記の御葉に

正和二年九月十日より十日と書也

後三位御行

秋の御葉に物も秋の日記の御葉に

言はるる御葉に物も秋の日記の御葉に

秋の御葉に物も秋の日記の御葉に

正和二年九月十日より十日と書也

後三位御行

秋の御葉に物も秋の日記の御葉に

言はるる御葉に物も秋の日記の御葉に

秋の御葉に物も秋の日記の御葉に

正和二年九月十日より十日と書也



舟よみむらさき

兼中納言定家

松竹の葉はなほの秋の風をくわはるるを  
時毎

續千載和歌集卷第六

冬前

時毎をよむるよみよ海を行き

法皇御製

時毎の歌よみむらさき月かきもあはれを言ひ

し時毎

院御製

いほよとつねの時毎の言ひは秋とゆきすりつね

し時毎

院二位家隆

秋の月時毎をよみよ海をくわはるるを

後一条入道前関白良房







おのれはまのついでに瓦礫をよりの木葉にま

る葉

美談云羽

非る月夜に風の吹くまのついでに木葉の

舞は流るるまのついでに木葉の

一何日か

前大納言

よのついでに風の吹くまのついでに木葉の

非の中らよのついでに木葉の

及命は師

ふらつ木を月よりの吹くまのついでに木葉の

おのれ二年十月は信の言ふに閑路の葉

前大納言

おのれの風よのついでに木葉の

ま

舞山流

おのれよのついでに木葉の

おのれよのついでに木葉の

権中納言

おのれよのついでに木葉の

おのれよのついでに木葉の

後膳院御製

おのれよのついでに木葉の







羊と木とを習せしむるに類ありしと申すはあつたる月記

百三十五時 権大納言経建

はしりて翌卯年とて久しと申すは九月とてつるをい

西園寺入道兼右大臣兼左大臣兼右大臣兼左大臣

兼中納言定家

言とて其の難れ日録とていふは此の時の事なり

西園寺入道兼右大臣

とて西園寺の難れ日録とていふは此の時の事なり

百三十四時 内大臣

備てよ記とていふは漢子名とていふは此の時の事なり

百三十三時 権大納言実衡

龍波とていふは言へ見立とていふは此の時の事なり

定法百三十三時 治千色

兼左大臣

龍波とていふは言へ見立とていふは此の時の事なり

西園寺入道兼右大臣兼左大臣兼右大臣兼左大臣

兼中納言定家

兼中納言定家

龍波とていふは言へ見立とていふは此の時の事なり

平重村



此の如く此の海風をよみてかきく月なまをのり  
かみえ年内裏すめり方よきをよ

大炊御門右大臣

此の如くわかれ末と海風よこりあかき  
も

小泉守

互によ様ののきをたすして氷をゆめりの月  
友原敏行卿位

おのりのあまは月のゆきよきてあきのあか  
みる御位

かきたんよ海人のゆきよきてうらたへてあか

水まよ

中務の恒の親

いよの秋の氷うらたへて水は鴨のまねとあか  
兼中納言定房

氷まよのこころの鴨のよの風はほくらあか  
海氷とらつらよよ海をゆくま

とらつらあか

あはれよ同様の海風の中らつらあか  
も

堤二位守子

あはれよわかれ信のよつらあかあか  
堤二位行家



はしりては、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

お歌は御

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

平町元

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

お原直經

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

弘安四年三月廿一日

お原直經

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

大徳元年三月廿一日 後二条院御製

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

白河宮上御製

前大徳元年

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

弘安四年三月廿一日

お原直經

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに

弘安四年三月廿一日 忠房親王

あつたのよと、いかにいかにとて、あつたのよと、いかにいかに



をさす中

前権僧正を雅

文のよきあはれにふくむは神よむかへん

前大納言を女

わじ吹すそ世の日記を言てそのたよりあはれ

弘也え幸内裏らううは曉あぬ

そのとれおの月も新しうかやあなむしの夜

詠

友原を歌

水の流す様もししおのくみしりし

流流製

初よの流すのこもあつしとあつしあつし

此美は親と

作原町へ又も流すは流すのよもあつし

前大納言を世よあつしあつしあつし

は守國を

野もあつしあつしあつしあつしあつし

詠

平時を

あつしあつしあつしあつしあつしあつし

そのはあつしあつしあつし

前大僧正を歌

風もあつしあつしあつしあつしあつし



を中へ

は下定為

吉野上りの花のついでに

故二条院御製

いふを筑するの吉野のやけ

祐子内親王家紀傳

天保宮のついでに

中納言家持

わが宮のついでに

皇太子文太史後成

横手すゝたに

吉備のついでに

まゝのついでに

水元は親王

吹かると花の末に

花えはついでに

前大納言為世

高砂の屋上は

暖丸糸内大臣家

有原澄祐朝臣

吉野のついでに



松音と は守國助

ふんと松音との一梅さうの通いづる音のあはれ

音朝の 前大僧正深助

深まらる年とついでつらふやうの松の白き

は守國助

下折の言さきついでつれ松のたれえの白き

大飛にき徳

ふ松よつれたしそら白きつら信田のたれ木束の

友原政盛

友原のついでつれ松のたれえの白き

西村は師

吉野の松よつれたしそら白きつら信田のたれ木束の

相持

相持のついでつれ松のたれえの白き

大の政國

大の松よつれたしそら白きつら信田のたれ木束の

永正二年のついでつれ松のたれえの白き

は守國助

冬松のついでつれ松のたれえの白き

友原宗行

冬松



冬栢の尾花よきまの音の久しにわたりし海風  
海音は故よりくさくさなる

兼大納言なる氏

海風よきまの音よきまの音よきまの音よきまの音

百三十三番 一 是也

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原のよきまの音よきまの音よきまの音

新田河原



はまやりの下なる人々に傳へたる御書の心は  
正の流を矣

この世の風を言さくゆふより竹の葉に  
正治二年十月十日の御書

後二位家隆

清の言に云ふは御書に於ては  
横書と

之の言に云ふは御書に於ては  
上階入られた大名家十の御書

源兼光御書

清の言に云ふは御書に於ては  
御書と

この言に云ふは御書に於ては  
権中納言御書

この言に云ふは御書に於ては  
御書と

後下中納言

この言に云ふは御書に於ては  
御書と



永皇内大臣

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

御事 御事

御事 御事

御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事



前代書集皆敬定

月日の三つは後より前より記すはしめて書く年を

たす

書くは月日はさしおきしるはるる通ぬる年記

平定時期也

古くは年記とて記すは年と號しては

書くは後入るは開白の書

は古くは後の年記書はしるはるる年記

は書くは年記書

は下定也

前代書集皆敬定

月日の三つは後より前より記すはしめて書く年を

書くは月日はさしおきしるはるる通ぬる年記

平定時期也

古くは年記とて記すは年と號しては

書くは















心から出て くるお花よ 青いお花よ  
あやふさふさ のらりー けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい

龍乃舟

あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい

あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい

人丸

あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい  
あふふふふ のらりーの けしきい

皇太后名交り文後成







後には考入る前同白を致有

いふ人揚りすし世より人いしし世より人いし  
物

このえ 善縁な忠

二葉のくさきりし一松の本はなるはまの  
かのえ

とよめなるはまのくさきりし一松の本はなるはまの  
庚申の松まじりの人

伊藤大物

あまのなるはまのくさきりし一松の本はなるはまの

じりいり 津守回眺

きよなるはまのくさきりし一松の本はなるはまの  
すまのなるはまの

滝信廻眺

かよなるはまのくさきりし一松の本はなるはまの  
はまのなるはまの

皇太后名交る又後成

御波人若の若くわなぐ鏡なりし守じりノ輝か  
よなるはまの

入る来る致大信

いふなるはまのくさきりし一松の本はなるはまの  
た大信



まゝの國はさしつかへなくはなれぬ

さしつかへなく 兼中細言定家

神子に世にあらん様はあはれなき

あはれなき 兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

あはれなきはなれぬ 兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

あはれなきはなれぬ 兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

あはれなきはなれぬ 兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

あはれなきはなれぬ 兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

あはれなきはなれぬ 兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

あはれなきはなれぬ 兼大細言定家

あはれなきはなれぬはなれぬ

あはれなきはなれぬ 兼大細言定家



夜ふくまらば花梅影のしづかに  
柳並に春のしづかに

境三位頼政

古柳のしづかに  
春のしづかに

入る春のしづかに

しづかに  
しづかに

大僧のしづかに

しづかに  
しづかに

信実朝臣

しづかに  
しづかに

大僧のしづかに

しづかに  
しづかに

しづかに  
しづかに

并乳母

しづかに  
しづかに

しづかに  
しづかに



Handwritten text in cursive script, top line on the right page.

Handwritten text in cursive script, middle line on the right page.

Handwritten text in cursive script, bottom line on the right page.

Handwritten text in cursive script, second line from bottom on the right page.

Handwritten text in cursive script, middle line on the right page.

Handwritten text in cursive script, second line from top on the right page.

Handwritten text in cursive script, third line from bottom on the right page.

Handwritten text in cursive script, fourth line from bottom on the right page.

Handwritten text in cursive script, middle line on the right page.

Handwritten text in cursive script, top line on the right page.

Handwritten text in cursive script, second line from bottom on the right page.

Handwritten text in cursive script, top line on the left page.

Handwritten text in cursive script, middle line on the left page.

Handwritten text in cursive script, second line from top on the left page.

Handwritten text in cursive script, third line from bottom on the left page.

Handwritten text in cursive script, fourth line from bottom on the left page.

Handwritten text in cursive script, fifth line from bottom on the left page.

Handwritten text in cursive script, middle line on the left page.

Handwritten text in cursive script, top line on the left page.

Handwritten text in cursive script, second line from bottom on the left page.















海河

兼大納言母

と羽をみるま帆をさかるとの風の吹くころのつらみ

きりす

平兵衛村

うららかに信ちしむるころのあはれをみはなすころのあはれ

よかん人しらす

くる月よやまなくして海けよりあふきこむる音のあはれ

船の漕ぐつらみのかげのあはれをみはなすころのあはれ

新流法師

かこのころ都やいづれかのあはれをみはなすころのあはれ

百三十五時

権大納言定房

船のあはれをみはなすころのあはれをみはなすころのあはれ

権乃公

津守四郎

海の上の波よたらしめて月も夏夜の歌をうたへ

はらけく下船せよと赤石といふあはれ日較といふあはれ

あはれ

大に忠成羽長女

あはれとていふあはれとて海風よらるあはれの松よひのあはれ

あはれ

友原秀賢

あはれとていふあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれ

兼大納言通直

はらけくと信ちのまは漕ぎくころのあはれとてあはれとてあはれ







中

藤右近大納言朝

朝よのまよとお取とらぬにふらぬのまよのまよのまよ

孫守中一了

藤信は脚

孫夜啼少く立よまよのまよのまよのまよのまよ

孫一了

了成上人

朝よのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

藤原重政朝臣

朝よのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

藤原高

朝よのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

藤原為成朝臣のつらよのまよのまよのまよ

わやのまよのまよのまよのまよのまよ

藤原信正朝臣

孫のまよのまよのまよのまよのまよのまよ

中

藤原朝臣

朝よのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

孫一了

平宗直

外まよの孫のまよのまよのまよのまよのまよ

孫守中

平貞時朝臣

まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ







弘安百三十九年

弘安百三十九年  
弘安百三十九年

永海門院

弘安百三十九年  
弘安百三十九年  
弘安百三十九年  
弘安百三十九年  
弘安百三十九年

はり下る我

弘安百三十九年  
弘安百三十九年  
弘安百三十九年  
弘安百三十九年  
弘安百三十九年

弘安百三十九年

權大僧部成倫

弘安百三十九年

後三位宣子

弘安百三十九年

百三十九年

弘安百三十九年

弘安百三十九年

弘安百三十九年

弘安百三十九年



り言て蘇麻の如くは春に生るる月影の如

くは春の如く

天は春の如くは春の如くは春の如くは春の如く

惟宗忠宗

草花房の如くは月影の如くは春の如くは春の如く

百の如くは春の如く

信の如くは春の如く

月影の如くは春の如くは春の如くは春の如く

月影の如くは春の如くは春の如くは春の如く

公海門院の如く

春の如くは春の如くは春の如くは春の如く

春の如く

惟義門院

春の如くは春の如くは春の如くは春の如く

源重氏朝臣

春の如くは春の如くは春の如くは春の如く

春の如くは春の如くは春の如くは春の如く

春の如くは春の如くは春の如くは春の如く

丹波忠守朝臣

春の如くは春の如くは春の如くは春の如く

前系議雅友

春の如くは春の如くは春の如くは春の如く



前中納言定房家より行路林望とて  
しよ 友原清忠朝臣

ぬきつも狂きあり孫衣あさき山の松まふ下家  
林の松あし下きうり依松中山とて

親意法師

ひらりちの秋の中しよ夫は秋風さしくまの月影  
しよしよ 前中納言定家

都さくものさすよあしよのこしよとていねん  
友原基行朝臣

曉の関の松事さきとて都しよつらあふさつさる海  
あしよとていねん

親部成家

清入の信の雲さきとて月と松と新とていねん  
暁睡りよ 惟宗え吉

秋とてさしよらこいねん月の夜のあつらん  
しよしよす 中原師貞朝臣

孫人の座れ山風さきとて枕よのさる月の  
あつらん 兼光久

昔しとていねんさきとてしよとていねん  
河津孫政家百とていねん 孫



藤原門流が

つらなるといふ事の子の事なるべし  
弘安百のちうおのち

藤原大納言為氏

日約くはしめしめんとく  
平兼貞

さくさくさくさくさくさく  
おえ百のちうおのち

藤原大納言為氏

この事なるべし藤原の事  
藤原大納言為氏

は守國道

おのちのちのちのちのちのち  
大納言為氏

藤原大納言為氏

おのちのちのちのちのちのち  
おえ百のちうおのち

贈後三位為子

おのちのちのちのちのちのち  
お申様



こと清製

書の中へじいのはなをまに海より船のたれを  
はま移移の家をすしう今も開路書物

前中納言の定家

おつる海の花をたれ移し月をえたる  
人の歌をこしよ移しんもつし

は眼を融

都な海の花をたれ移し月をえたる

中

人の歌を

都な海の花をたれ移し月をえたる

都な海

は眼を融

都な海の花をたれ移し月をえたる

前中納言

都な海の花をたれ移し月をえたる

都な海の花をたれ移し月をえたる

都な海

前中納言

都な海の花をたれ移し月をえたる

都な海の花をたれ移し月をえたる

都な海

前中納言

都な海の花をたれ移し月をえたる



一

前大納言為氏

あまのついでにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま  
のついでにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

兼中納言為相

あまのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま  
のまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

権大納言経練

あまのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま  
のまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

大納言院清製

あまのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま  
のまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

兼中納言中一様

後主納言為氏為氏

あまのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま  
のまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

はるのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

あまのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま  
のまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

あまのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま  
のまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま

はるのまゝにわたりてはるのまゝのまゝよるはあま







本邦よりして西と列とある

は守國

こゝにあらはれぬはあはれぬ事なり

しと月よ

皇太后文太后成

らして邦作とみまわ天の原をともひるは位え

しと月よ

しと月よ

文をき一邦作とみまわ天の原をともひるは位え

は守國道

其よりつらき邦のみと繩をひけて力よみ

は守國

前大細と家

管と治とつらき邦のみと繩をひけて力よみ

は守國

前大細と家

おほくはしとつらき邦のみと繩をひけて力よみ

しと月よ

前大細と家

おほくはしとつらき邦のみと繩をひけて力よみ

は守國

おほくはしとつらき邦のみと繩をひけて力よみ

は守國



Handwritten text in cursive script, likely a signature or a short passage.

前大細之為氏

Handwritten text in cursive script, continuing the passage.

前傳之文証

Handwritten text in cursive script, continuing the passage.

前集後雅友

Handwritten text in cursive script, continuing the passage.

一葉内人信

Handwritten text in cursive script, continuing the passage.

前中納言氏家

Handwritten text in cursive script, continuing the passage.

前盤井又乃前右大臣

Handwritten text in cursive script, continuing the passage.



神祇の心と海を行き

後二条院の製

今よりいかにして書目なるものなる年月

中細言定通

の心と海とを統一書目と一取の神とを

中細言

中細言

書目と海とを統一書目と一取の神とを

中細言

神祇の心と海とを統一書目と一取の神とを

中細言

神祇の心と海とを統一書目と一取の神とを

中細言

中細言

神祇の心と海とを統一書目と一取の神とを

中細言

中細言

神祇の心と海とを統一書目と一取の神とを

中細言

中細言

神祇の心と海とを統一書目と一取の神とを

中細言

中細言



とてはたかたの御事とてはたかたの御事とてはたかたの御事

はたかたの御事

なるの御事とてはたかたの御事とてはたかたの御事

二の御事はたかたの御事とてはたかたの御事

権大納言経継

そとにたかたの御事とてはたかたの御事とてはたかたの御事

弘長百三十九年

入道前右大臣

おとすにたかたの御事とてはたかたの御事とてはたかたの御事

えんぎとてはたかたの御事とてはたかたの御事

百三十九年

後二位家隆

おとすにたかたの御事とてはたかたの御事とてはたかたの御事

弘長

はたかたの御事

おとすにたかたの御事とてはたかたの御事とてはたかたの御事

弘長百三十九年

権子内親王家紀伴

おとすにたかたの御事とてはたかたの御事とてはたかたの御事

弘長百三十九年

後三位氏久

おとすにたかたの御事



まのしる年とあすはのしるしと神のにおいの影

かー

兼大納言賢忠

へんせいのてしむらりくらのまのしるしとあすのま

神祇よ

権僧正恒守

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

兼大僧正仁徳

まのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

兼大僧正玄徳

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

神恩のすまひとあすのしるしとあすはのしるしと

は照道春

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

神堂のあすはのしるしとあすのしるしとあすはのしるしと

天台座主慈勝

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

兼大納言有世

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

あすのしるしとあすはのしるしと神のにおいの影

祝部行成



言一邦の臣民より一國の領土を譲れ

は親交なき

人の子にたゞとてはく邦臣は邦臣にあらざるは

は東國向幕右大臣

人の子にたゞとてはく邦臣は邦臣にあらざるは

東國向幕右大臣 押印

天啓のしき物なる邦臣は邦臣にあらざるは

東國向幕右大臣

は親交なき

言一邦の臣民より一國の領土を譲れ

は親交なき

我國は内政の文を致しはく一とてはく

東國向幕右大臣

は親交なき

言一邦の臣民より一國の領土を譲れ

は親交なき

我國は内政の文を致しはく一とてはく

東國向幕右大臣

言一邦の臣民より一國の領土を譲れ

は親交なき







承元二年依元院可之方也一時初承元

前大納言為世

治承元年依元院可之方也一時初承元

又治承元年依元院可之方也一時初承元

前中納言為世

天德元年依元院可之方也一時初承元

又天德元年依元院可之方也一時初承元

治承元年依元院可之方也一時初承元

前中納言為世

康治元年依元院可之方也一時初承元

又康治元年依元院可之方也一時初承元

治承元年依元院可之方也一時初承元

前大納言為世

久遠元年依元院可之方也一時初承元

又久遠元年依元院可之方也一時初承元

治承元年依元院可之方也一時初承元

前大納言為世

久遠元年依元院可之方也一時初承元

年



續千載和歌集卷第十

秋歌奇

皇統の海日漸か至十音未滿の皇の御  
よ海を行き

は皇清製

日よ多く新の御と人定の月よとて  
之摩地現前

月のたつちよとて人定の御とて  
十位の海の用い庫授寶

いかに人の御とて人定の御とて  
其如親よとて御とて

弘法大師

この千載唐とて人定の御とて  
祝言院よとて御とて

権僧正初年

祝念の御とて人定の御とて  
志業として信のまげとて

大僧正の時

志業の信唐とて人定の御とて  
此れ八月齋嚴細信淨えの御とて

前大僧正の時



善くはなすべし一巻と女の世は日くくもさるる

妙観意の如くは下守禅

常時てくぬあしのかんよくぬと信日月の歌か  
おけ自洲の雲從出と一可也

兼大僧正公院

日月のやまへ出ぬに庭も常も立とてぬ  
大日蓮成就忠地品玉姫妙法淨土續意記

了如上人

くつらへ言今とてぬにのみくかんるのま  
香好院田町よめてぬ後と行て美くぬ

美後上人

まは鏡うつよよる海くまよと世の松とをわら  
香好院浄教

よまはく誰も松よぬよかとの歌よけよとてぬ

まは院のむよ四師人して

は白濁教

くの世の常は信し理らぬ梅のまをそみ

兼大僧正浄助

はの世のやうらう地ぬよぬきのむのまよとてぬ

は下道我



Shōmei no Uchiwa ni Sumi no Uchiwa ni Tsumi no Uchiwa ni

はたはた序不照一東言と

入る親とさあ

まのらふ言とてしとほのむらむらとてしとほのむらむら  
我見煙の松平え瑞ぬ斯

深む長胡長

昔より一まのえれがくねとてしとほのむらむらと  
言便不漸く横刃也

は眼親珍

はまの神とてしとほのむらむらとてしとほのむらむら

母の国とてしとほのむらむらとてしとほのむらむら  
ふとて表紙の繪とてしとほのむらむらとてしとほのむらむら

前中納言定家

はたはた序不照一東言と

序不照一東言と

直末院清製

まのらふ言とてしとほのむらむらとてしとほのむらむら  
信ねふ序不照一東言と

はたはた序不照一東言と

はたはた序不照一東言と

業子とてしとほのむらむらと

僧都源信



一時の事なり一處の事なりいつとも二本を校する人々  
の賢門院中納言人といふは徳大寺の  
まをむきつゝ授託ある未出世威徳の事なり  
の事なり  
皇太后の御事なり  
いふ事一をきんしてはよこせしむる事なり  
安未行ふは入禪定見丁事なり  
その事なり  
涌出ふ経地而涌出  
地水の事なり  
其量ふ作乞教を後至他國

前代古來傳推言

身は木の三山木ありて葉のそまをばら  
方便現涅槃る言ふ滅度

権人僧坊隆剛

ふりてその事なり  
勸教の事なり  
人のたれや智の山樗にふりて花の下を  
法行世常是を滅はるといふ事なり

前代納言の家

事なり世の事なり























ついでに... 権大僧正... 権大僧正... 権大僧正...

権大僧正相尋

... 権大僧正... 権大僧正... 権大僧正...

権大僧正相尋

... 権大僧正... 権大僧正... 権大僧正...

権大僧正相尋

... 権大僧正... 権大僧正... 権大僧正...

権大僧正相尋

... 権大僧正... 権大僧正... 権大僧正...

権大僧正相尋

... 権大僧正... 権大僧正... 権大僧正...







Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or location.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or location.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or location.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or location.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or location.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, likely a name or title.



寛文四年正月八日 教民部に宣旨

申付しに、先年八月に御座りし御座りし御座りし

御座りし

御座りし

申付しに、先年八月に御座りし御座りし御座りし

御座りし

申付しに、先年八月に御座りし御座りし御座りし

御座りし

申付しに、先年八月に御座りし御座りし御座りし

御座りし

御座りし

申付しに、先年八月に御座りし御座りし御座りし

御座りし

御座りし

御座りし

御座りし

申付しに、先年八月に御座りし御座りし御座りし

御座りし

御座りし

申付しに、先年八月に御座りし御座りし御座りし

御座りし



はしる人へはかきつるの流し採りたる  
の教のりかへはかきつるのりかへはかきつる

斬首上人

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

斬首上人

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

斬首上人

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる  
律師永観

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

親は脚

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる

かきつるのりかへはかきつるのりかへはかきつる



二品は親王又は

友に我ら等の心をなすに...  
又は親王親友の業を以ての事にして

基後

其のそののりおるに里にの月や

入る二品親王又は

ゆるり...の目...のや...  
も

蘇人僧にたき

...の...  
...

...



